

■令和7年5月定例記者会見

日時：令和7年5月22日(木)午後2時～3時

場所：吹田市役所高層棟4階特別会議室

【5月定例会等に関する質疑応答】

吹田市広報課

それでは記者の皆様からご質問をお受けしたいと存じます。

まずは先ほどご説明いたしました予算案件及びPR案件について、ご質問をお願いいたします。

どうぞよろしくお問い合わせいたします。

記者

まず1点目、「ここあぼ」なんですけど、アンケートは、満5歳になる年中児、全員ということでよろしいですか。人数とかもわかればありがたいんですけど。よろしくお問い合わせいたします。

吹田市すこやか親子室

今回、年中児になるお子さん全員になりますので、全部で3300人になります。

記者

はい。

一番気になったのは配慮が必要な児童という子たちなんですけれども、要配慮の児童っていうのは、どういう状態を想定しているのかなと、ちょっとよく理解できないところがあって。自閉症とかね、そんなことも仰ってたんですが、どういった児童を想定しているのかなっていうのが、何とも言えないかなというところがあって。発達障害っていうのは理解できるんですけども。

吹田市すこやか親子室

おっしゃいますように集団生活に課題のある児童が対象になっています。具体的には落ち着きがないとか、コミュニケーションが難しく、マイペースであるとかっていうような、自閉症スペクトラムに該当するようなお子さんであるとか、あとは吃音とか手先が不器用であったりとか、運動がちょっと苦手だったりとかというような、学校生活の中で、困難が予測されるようなお子さんが対象になっています。

記者

つまり、ご家庭で見ているその成長具合と、実際の平均的な成長度合いとの乖離性というか、

そういうのをアンケートで明らかにしていこうと、そういった考え方になるんですか。

吹田市すこやか親子室

そうですね。

基本的にはこのアンケートでは、臨床現場で発達の特徴を把握するための評価尺度みたいなものを用いた、医学的に一定の評価をされたものが、システムとなっているパッケージというか、我々が開発したとかいうものではなくて、そういった商品というか、システムがございまして、それを活用させていただくというものになります。

記者

あと、中の島公園のリニューアルなんですけどね。

江坂と桃山公園が、成功事例って仰っていましたが、どう判断して成功しているっていうような認識をしているのかなっていうのを教えていただけたら。

土木部長

それぞれ特徴があるんですけども、江坂っていうのは、立地条件にも相まっているんですけども、現地に行っていただいたらわかると思います。未だにもものすごく多くの方に来ていただいているところが一番大きいかなというふうに思っております。

桃山公園はもともと落ち着いたある公園で、立地的にも千里ニュータウンの静かな場所にあるっていうところで、そこに我々としては、自らお金をかけて整備をしなきゃいけないところを、初めて民の力、国のP a r k - P F Iっていう制度を活用させていただいたんですけども、民間から、1割の投資をいただいて、それで継続してやっています。そこも現場に行っていただいたら分かるんですけども、管理についても非常に細やかで、清掃も毎日やっていただいていますし。

あと先ほど説明してなかったんですけども、公園協議会というものを立ち上げて、地域の方々、公園に関係するボランティアであったりとか、そういった人たちを集めて、この公園をどう綺麗に管理していくか、どういうふうに使いやすくしていこうかっていうのを定期的にやっていますので、今のところ、そういった意味では非常に吹田市としては良いかなと。併せて、我々としての直営管理部分が減ったというところもありますので、そういった意味で魅力向上、維持管理という意味で、成功と捉えています。

記者

この中の島公園が3か所目っていうふうな認識でよろしいですか。

土木部長

おっしゃる通りです。官民連携事業としては3つ目です。

記者

なるほど。わかりました。ありがとうございます。

吹田市広報課

他にご質問ございますでしょうか。

記者

そもそもなんですけど、この「ここあぼ」って何の意味ですか。

吹田市すこやか親子室

こどもの心のアセスメントポイントっていう、頭文字をとったものです。

記者

やっと意味が分かりました。

これ、受注業者はどこなんですか。委託業者は。

吹田市すこやか親子室

サーベイリサーチセンターです。

記者

この事業者さんは全国のいろんなところで、こういったことをやっているってことなんですか。

吹田市すこやか親子室

はい。こういったウェブでのスクリーニングシステムを持っていらっしゃるのが、ここの業者さんだけになります。

記者

府内で初めてということですけど、他府県はどうなんですか。

吹田市すこやか親子室

青森県弘前市と、あとは愛媛県の今治市さんが先行してされておられます。

記者

その効果事例っていうか、こういう効果があったという成功事例みたいなのがあれば。

吹田市すこやか親子室

弘前市さんがもう 10 数年前から 5 歳児の健診に取り組まれていて、もともとは問診票でされておられたんですけども、数年前からこのウェブアンケートをすることによって、回答率が上がったというふうにはお聞きしております。相談の方にもスムーズに繋がるようになって、園や就学先の学校とも。これ問診なので、その問診を起点として、相談に繋いで、お子さんの様子が明らかになりますので、情報共有がしやすくなったということで、学校就学後の問題が減って行って、不登校の減少にも繋がったというようなことを、弘前市さんからお聞きしております。

記者

これ予算は幾らですか。事業費は。

すこやか親子室

すみません。お調べして後で回答させていただきます。

記者

はい。大丈夫です。

吹田市広報課

他にご質問ございますでしょうか。

次に、今回ご説明いたしました案件以外でご質問ございましたらお受けいたします。

記者

太陽の塔の重文指定の件なんですけれども、改めてそのまず前提条件の確認として、万博記念公園自体は吹田市にあるけれども、公園自体は府の持ち物であって、太陽の塔は財団、岡本太郎財団の管理下にあるという

後藤市長

管理は大阪府です。(財団は) 使用权、著作権、そういったものを、お持ちになる。

記者

管理は万博記念公園マネジメントパートナーズがやっている。

ただ、その太陽の塔の著作権など一切の権利に関しては、岡本太郎財団が持っている。

後藤市長

どこまでが一切かはわかりませんが。一切と言うと言いすぎですけど。

記者

まあとりあえず著作権っていうか、勝手に使えないということですね。なるほど。
今回重文指定を受けたということ自体は、大変おめでたいことではあるんですけども、それを、吹田市なり大阪府の施策に取り込めないっていう部分に関して、ちょっとどうなんだろうというお考えがあるということでしょうか。

後藤市長

重文に指定されるされない以前から、ずっと同じ思いです。
今回されたからといって、「ああ、そうですか」っていう、「よかったですね」っていう。

記者

その理由は。

後藤市長

いやだから、吹田市は関与できませんので。
例えばそれを、吹田市として表に出して、グッズを作ったりとか、チラシを作ったりとかして、「よかったねー」みたいなことは、それはできないので。
これまでもそこは制限かかってましたので。あえて今のところ何もやる予定はないです。

記者

例えば重要文化財のあるまち吹田みたいな感じで、観光誘客とかをすることも難しい。

後藤市長

いや、それはできますね。ただ、十分来られてるので。
あえて、気づいて欲しいというか、日本中で有名なので。

記者

そうですね。はい。
なので、市長の率直な受けとめとしては、嬉しい反面ある意味ちょっと、他人事というところちょっとあれですけど、何て言うんでしょうか。

後藤市長

いや吹田市民からしたら間違いなく嬉しいんですよ。
ただね、太陽の塔を我々は普通に見てますので。特に珍しくも何ともないですよ。
ただ、多くの人が来られて、一生懸命写メ撮られて、「ワーッ」て、言われるんですよ。それを見て、「あー愛されてるんやな」っていうのは、改めて気づく感じで。

だからこれまでもあの太陽の塔とコラボしながら、吹田市の一つのランドマークみたいにして取り組んでこれなかったっていうのは、そこに影響はあるんでしょうね。

でも、多くの市民、それからその方々は、「太陽の塔の吹田市」っていう認識をされてますので。

記者

吹田市民にとっての太陽の塔って、地元の誇りっていう認識なのか、それとも何て言うのでしょうか、今おっしゃられたような事情からして、たまたま吹田市にあるすごいものぐらいの感じなのでしょうか。

後藤市長

港区民にとっての東京タワーみたいなものではないですか。

「我らが東京タワー」っていうより、あれも国レベルの誇りですよ。

太陽の塔も、吹田市の太陽の塔というよりも、70年万博の時の大阪であり、我が国の誇り、レガシーとしての意識、それがたまたま吹田市にあると言いますか。

都市魅力部長

我々シティプロモーション、まちの魅力発信セクションとしては、市長が先ほど申し上げたように、日本、アジアで初の万博を行う開催地としてのプライドっていうのを我々も持っていますし、市民の方も持っていると思いますし、

全国から太陽の塔を目指してこられる方もいらっしゃる。全国に誇る施設がこの吹田にあるっていうのは、市民の財産でもあり、誇りでもあります。

ただ、裏の話をするとちょっと市長の言うような。

辰谷副市長

わかりやすく言うとね、ゆるキャラね。ゆるキャラ作るなんて絶対駄目なんですよ。

記者

「太陽の塔ちゃん」みたいな。

辰谷副市長

そうそう。モチーフにした形で何かやるのは駄目で、実はそういうものはもう一切ね、やめてくれと。

写真はいけますよ。

都市魅力部長

すべて写真とかについても、BMPさんを通して財団の方に確認をさせていただいて、OKと

いうお返事をいただくと。

写真もOKの場合もありますけど、使用目的が、財団さんの意向に沿わない場合はNG。
まあ行政が使うので、その作品を冒涇することはないんですけども、やはりその財団の中で
のレギュレーションみたいなこともあるようで。
それに従ってないと我々としては使えない。

記者

市長のお考えとしては、地方公共団体で、明らかに使用目的が公益目的なんじゃないですか。
そういう団体に対しては、その太陽の塔の名称であったり、著作権の使用はどうしていくべき
なんじゃないかというお考えですか。どうなったらいいなとお考えですか。

後藤市長

それは自由に使えたら良いなと思います。国民の公共財産だと思ってますから。芸術作品で、
それもあれだけの建築物が、公園の中にあるって、公園も国民のもので、その中にあるのも70
年のレガシーで、それを自由に使えないっていうのはね。
揶揄するような使い方は、もちろん駄目ですよ。でも、それを誇りにするような使い方も制
限されるっていうのは悲しいです。残念です。

記者

諸々ひっくるめてもう1回お尋ねしたいんですけど、太陽の塔が重文指定を受けて、市長は
率直にどういうお気持ちになりましたか。

後藤市長

「ああ、ようやく」って思いましたね。

記者

むしろですか。

後藤市長

はい。当然その資格はあったと思っています。
ようやく認められたかっていう。

記者

その資格があったのはどうしてだとお考えですか。

後藤市長

やっぱり、55年間の期間を、表してるレガシーなんですよ。

55年前がどんな時代だったかを映しているじゃないですか。

55年間経って人類はどうなったのか、本当に進歩したのか。(当時のテーマは)技術の進歩とは言ってないんですよ。人類の進歩なんですよ。人類の調和はどうなったのかというのをまっすぐ見据えてるわけですよ。

だから、このシンポジウム(平和シンポジウム「1970→2025 - 紛争から考える - 調和のとれた社会とは」)をやるんですよ。その哲学が夢洲の中であるべきだったんですが。我々は55年前、1970年万博の開催地として、その責任があると思って、ささやかながらこのシンポジウムをやらせていただくと。

記者

現状先ほど言われたような理由によって、吹田市として太陽の塔が重文指定を受けたことを使ったの、なにかって言うのは。

後藤市長

プロモーションは特に考えてないです。

記者

ありがとうございます。すみません長々と。

吹田市広報課

はい。他にございますでしょうか。

はいどうぞ。

記者

先ほどシンポジウムの話が出たので一点お伺いしたいんですけども。

今回55年前の70年万博の時の、調和のとれた社会からどうなったかっていうことで、シンポジウムを開かれると思うんですけど、実際、今回の大阪関西万博の「いのち輝く未来社会のデザイン」みたいな、なんかそういうところのテーマに関連した話とかは特に予定してないですか。

後藤市長

もちろんあります。

未来社会のデザインをテーマにしていますよね。未来を語るわけですよ。来し方行く末、その真ん中に今があるじゃないですか。来し方って言うのは、55年前なんですよ。55年前に岡本太郎がああ情報を発信した。あちこちに原爆の絵とかがありますよね。それが懸念してい

た55年後に、人類は進歩して調和したと言えますか。そこから今度、55年先、半世紀先を読むっていう。そのためには、アカデミアの先生方と、海外の事例も含めて、シンポジウムをしよう。

それを是非若い人にも聞いてもらいたい。我々がこの55年、何をしてきたのかっていう話です。そういうシンポジウムを、やろうと。

記者

紛争、ウクライナ、パレスチナといった、そういう大きい話もあると思うんですけど、吹田市独自の目線というか、吹田市民の目線みたいな話とか、あたりですか。

後藤市長

それは話題には入れません。

記者

もうあくまで。ざっくりと。

後藤市長

あまり暗いシンポジウムにはしたくないんですけど、いのち輝くの裏で、どれほどの人命が失われてきたか、そして今も失われているか。

そこに触れずにいのち輝くっていうふうに、それ言うのをやめようよっていうね。それは私じゃなくて、先生方から出ると思うんですけど。

記者

なんかこうある意味、今の万博のコンセプトに対して、意義を突きつけるじゃないですけど。

後藤市長

いやいや、今のコンセプトに対して哲学的な背骨を入れるっていう意味です。

記者

なんかもうちょっといろんな視点から見てみようみたいな、そういうことですね。

後藤市長

いろんな視点っていうより中心の視点だと思うのですが。

吹田市シティプロモーション推進室

万博そのものが平和の祭典の一つかとは思いますが。

ただ、本万博につきましては、いろいろ対話型のものをするっていうものもあるかと思いません。なかなかそういった対話型のものへの参加って難しい、皆さんが参加できるものじゃないですので、やはり70年万博開催の地っていうところから、この当時のテーマに答えを出すと言ったら変なんですけれども、市民一人一人の方に考えていただくきっかけになるようなシンポジウムにして参りたいと考えております。

記者

ありがとうございます。

記者

配信とかはするんですか。

吹田市シティプロモーション推進室

配信はしない予定です。

記者

しないんですね。

聞きたいなと思いますけど。

吹田市シティプロモーション推進室

ぜひお越しください。

後藤市長

配信検討します。

記者

皆さん興味あるような気がしますけど。

それこそ太陽の塔の下でね、話したらめっちゃくちゃおもしろい感じはします。

ちなみになんですけど中ホールって何人入るんですか。

吹田市シティプロモーション推進室

450人です。

記者

これ入場は無料

吹田市シティプロモーション推進室
無料です。

記者
配信をお願いします。

辰谷副市長
検討します。

記者
ありがとうございます。

吹田市広報課
そろそろお時間になりますが、他に質問ありませんか。

記者
ちょっと後藤市長にお尋ねしたいことがあって。4月13日に、大阪関西万博が開幕してから、今日が初めての記者会見かと思うんですけど。
万博行かれましたか。

後藤市長
4回行きました。

記者
もうすでに。それは公務ですか。

後藤市長
公務3回。夫婦で1回。

記者
率直に行ってみてどう思いましたか。

後藤市長
私にはネガティブな情報が入りすぎてると思うんですよ。
その前から、建築の遅れがどうのとか。そんなのね、一般の人はそこまで意識してなくて、パツとって「楽しかった」とか、「いやー、どうかなあ」とかね。それが率直な感想だと

思うんですよ。

だから、私にどう思いますかっていう質問は、相当バイアスがかかっていますので。

記者

自分、万博の取材で夢洲にかなり行ってるんですけど、よく後藤市長の顔が頭に浮かびました。後藤市長どう思ったんだろうなど。

後藤市長

基本万博推進派です。それ言い続けているんですよ。

あそこはやっぱり子供にも見に行ってもらいたい。それが基本姿勢です。私もそういう思いで、見ました。あそこまでののにやっぱりすごく苦勞しているわけですよ。得るものも多いじゃないですか。

記者

熱中症対策はどうだと思われませんか。

後藤市長

熱中症対策、もうすでに被害者が出てますけど。

普通、教育委員会が判断をして、市長としては「いや、教育委員会がこう言うてますから」っていうスタンスですが、うちは違うじゃないですか。

市として、教育委員会と一緒に、子供を連れていくのをやめましょうっていう判断をした。その事情は、2011年から私、環境省のいわゆる熱中症対策の委員会の委員をやっているんですよ。

ある意味、熱中症の専門家と言ってもらってもいいんですよ。

それをもう14年、15年やっているんですけど、今年度も委託を受けてます。

「ここで黙るわけにいけへん」と。熱中症の危険性っていうのを、一般論で語るんじゃなくて、専門用語で語れる立場にある人間が、黙ってるわけにはいかない。

我々はWBGT（暑さ指数）を、1.5メートルでやってるんですよ。小学校1年生が行くんですよ。「地面から60センチのWBGTは？」そういった議論を一切してないじゃないですか。それから、バギーで行ったら非常に危険なんですよ。そういうことを言ったらまた「ネガティブなことを言って」と言われますけど、それを科学的に言える立場にある人間が、我が市の子どもたちを、守らざるをえない。その答えがない。

（大阪府教育庁に対し）40問の質問をして、回答が未だにないんですけど、回答がない限りは、行かせるっていう決断はできない、残念ながら。

記者

いや、お考えが変わってないということを確認したかったので。

後藤市長

いや、考えというか判断が変わってないんです。

情緒的な判断でなくて、質問に対する答えが来て、それが保護者もみんなが納得できるものなら、それでいこうっていうのは未だに変わってないですね

記者

はい。ありがとうございます。

吹田市広報課

間もなくお時間となりますが、他に質問ありませんか。

記者

今の話で言いますと、熱中症対策っていうのを現地で見られて、それで十分と感じたのか、実際目で見てですね、不十分と感じたのかどういふふうにお感じになったのでしょうか。

後藤市長

日影が少なすぎます。

それからドライミストが出てますが、一部にあるだけで、待機する列は炎天下ですから、そこに2時間居ると大人でも非常に危険です。

記者

待機ってパビリオンの列ですか。

後藤市長

そうです。おそらくこれから結果が出てくると思うんですけど、気温が35度を超えたら相当危険な状態になるのが、目に見えてますので。

大人は、水を飲んだり陰に行ったりとかできますけど。子供は、こう一列なって行って、「ここで待っときや」ってなった時に、そこまで日陰ないですから。6月入ったら厳しいなっていうのは、感じましたね。

記者

それと万博に付随してなんですけれども、2回目の自治体の子どもの招待を、吹田市はやらない。1回もやってないんですけども。

特に2回目は自治体の公費でやらなきゃいけないっていう部分もあって、やる自治体、やらない自治体分かれてるんですけども、それをやらないというふうに、判断したなんか理由はあるんですか。

都市魅力部長

予算を立てる段階で、子どもに対して、どれだけ教育的な効果があるかっていうのを測るための材料が乏しかったっていうのが現実です。我々としても万博は子供たちに夢を与えるという認識はあったんですけども、公費としてやるには判断材料が少なすぎたということで、予算計上を見送ったという経過がございます。

記者

どれぐらいかかる見通しだったんですか。

都市魅力部長

6000万ぐらい、いや7000万円です。

記者

効果っていうのはどういうところで判断されるんですか。

都市魅力部長

その判断するための材料がなかった。6000万、7000万と相当高額になってきますので、一定それを市民さんに対してご説明する必要があるんですけど、その時はまだパビリオンの内容ですとか、どういった形で万博を皆さんにお披露目されるか全く情報が伝わってこない。もちろん我々からも協会に対して、何度もアプローチはしたんですけども、お忙しかったのか、なかなか明確なお答えがいただけなかったので、見送るという結果になりました。

記者

これからまたそういうふうな協会が対応していただけたら考えるみたいな予定もないですか。

後藤市長

それでしたら、両親のチケットも配って欲しいですね。

子ども1名だけ無償にしてもらっても行こうかって多分ならない。だから、両親を含めて行こうかってなるような、

機運の醸成を高めてもらいたい。子どもにぜひ見てもらいたいっていうのは、それは思いませんね。

記者

吹田市の場合、1回目の無料招待は学校単位でやらないってことなんですけど、個人で行かれる子どもさんがいた場合に、公欠になるんですか。そういう仕組みを作られたんですか。

後藤市長

欠席には当たりません。その判断は教育委員会がしました。

記者

そういう相談があったときに市長もそうだなというふうに、思われたってことですか。

後藤市長

後から聞きましたが、良いと思いました。

記者

万博に行くために欠席する場合は、いわゆる公欠扱いになるってことですか。吹田市内では。

後藤市長

はい。

記者

何回までですか。

後藤市長

1回だけです。

記者

府からもらったチケットを使う分にはということですか。

後藤市長

そういうことです。

記者

府からもらったチケットを使ったかどうかまでちゃんと確認するんですか。

吹田市シティプロモーション推進室

そこまではしないと思いますけれども。

記者

性善説に基づいてずる休みはしてないだろうってことですね。

吹田市広報課

幹事よろしいでしょうか。

それでは、令和7年5月定例記者会見を終了いたします。

本日はありがとうございました。